

万葉集など古代和歌を研究する傍ら、現代短歌の作者として第一線に立ってきた。研究で蓄えた幅広い知識と古典和歌の文体を下敷きにしなから、世俗文化や話し言葉、独特のルビ遣いを交ぜ、格調の高さを崩す。「歌作も研究も、伝統的なものと俗なもの、いま生きているものを両方取り入れることに興味がある」

〈母えわたる厨上の思惟のつつまりはニツボンいつそ滅ぶるがよし〉（『晴朗悲歌集』、一九九一年）のように、きれいなことを拒むトリックスターのような詠みぶりは、歌壇にインパクトを与えた。「自分の歌は漫才の掛け合いみたいなも。自分が面白くなきゃつ

島田修三さん(70)

歌人・愛知淑徳大学長



第74回 中日文化賞

違和感を飾らず詠む

まんないと思つ」。社会に目を向け、時に自分をやめる。歌壇や、愛知淑徳大学長として身を置く学術界を批評する歌がある一方、近年では家族への思いや過ぎ去った日への追憶を切り出す優しい歌も増えた。

近代・戦後期の歌人・吉野秀雄の歌集に振したのがきっかけで、二十歳のころに短歌を作り始めた。開花したのは、短大に教職を得て愛知県に移り住んだ三十



島田修三歌集



蓬葺断想録 島田修三

代。生まれ育った横浜や東京とは違う風土に、自分が「異郷の者」であることを強烈に意識させられた。「ザラザラした違和感を歌に詠むとほっとした。調和からは文学は生まれないと実感した」。最高賞とされる遼空賞など三賞を受賞

「まだ・しゅらてつ」 1950年、横浜市生まれ。名古屋在住。早稲田大学院博士課程後期満期退学。歌人で国文学者の故窪田章一郎さんに師事。

した『蓬葺断想録』（二〇一〇年）など、昨秋までに九冊の歌集を刊行。研究では、古代歌謡など原初的な形の詩歌から、現在と同じ形の和歌になるまでの変遷といった和歌史を深めた。本紙でエッセー「昭和遠近」を連載するほか、短歌投稿欄「中日歌壇」の選者を務める。「コロナ禍になり、世相が敏感に反映される投稿作に「すくく価値のある記録文学」と目を見張る。

島田さんの代表的歌集「シジフオスの朝」と「蓬葺断想録」

（文化芸能部・松崎晃子）

喰ひて飲み酔ひて衰ふるシジフオスの朝こんこんと妻に諭さる

—「シジフオスの朝」から

おいそこの学部長、寝てんぢやねえよとわが言はざれば静かなり会議

—「蓬葺断想録」から

学術や芸術などの分野で、文化の向上に寄与した個人や団体に贈られる中日文化賞。一九四七年に、日本国憲法の施行を記念して中日新聞社が制定しました。七十四回目の今回は、各界から四十五件

の推薦があり、有識者の意見を参考に、二件（三人）の受賞が決まりました。これで受賞者・団体の合計は三百七十一人と十団体になります。新たな受賞者の業績、横顔を紹介します。